

深夜。

街外れの住宅街を抜けた先、雑木林の奥にある廃ビル。

取り壊されもせずくたびれた状態で残されたこのビルに、夢子はひとりで訪れていた。

片手に配信用のスマホ。

もう片手にコメント確認用のスマホ。そちらは高速でコメントが流れている。

夢子はホラー系ジャンルで活動する、いわゆるストリーマーだ。

最初はホラー系ではなかったのだがたまたま取れ高を狙って行った心霊スポットの動画が極端に再生数が伸びてしまった。その数字が忘れられずすっかり動画がホラー系ばかりになってしまったのだ。

だから、夢子は元々ホラー耐性があるわけではない。再生数とスパチャのために恐怖心を黙らせている。

「うわ、こ、こわ〜……。さすがに雰囲気ある…」

錆びた扉をくぐって中に入るとカビ臭いコンクリートの壁に、剥がれ落ちかけている壁紙、裂かれたように垂れ下がっているカーテン。

不気味な静けさと何故だか肌寒い空気が夢子の肌を撫でる。

明るいのはスマホの画面だけ。その弱い光が夢子の顔を淡く照らしていた。

「なんかね、最上階が一番危ないっぽい。そこの窓から何人も飛び降りてるとか…。そこ行ったら三脚立ててしばらく滞在してみよー」

足音がやけに響く。

夢子は自分を励ますようにコメントを読み上げそれに返事をしながらゆっくりと階段を登っていった。

「よし…この部屋だ。じゃあ三脚立てるね～…。……しかしマジで怖いな～、ちびりそう」

夢子はいつも思う。

ライブ配信だからこういう所へ来れるのだ。

コメントがあるだけで一人だという恐怖心がかなり薄れるから。

明るく振る舞い、リュックから取り出した三脚にスマホをセットした。

そしてそこに映る位置に立ってコメントを読もうとしたときだった。

「……えっ？」

風が吹いて髪が揺れた。

それから背後にぬるりとした生温い気配。

「誰か、い——」

振り向こうとした夢子の口が何かで塞がった。

声が出せない。

(なに、だれ……！？)

抱きかかえられるように体を締め付けられる感覚がして。

それから、

ぬる…♡

冷たくて湿ったものが耳を這った。

（ちょ、ちょ、ちょっと、なに、これ、こわいこわいこわい！！！！）

見えない何かに口を塞がれ耳を撫でられ、今度は腰の辺りと腕にも這い上がってくるような感触がある。

夢子は驚いた拍子に落としてしまったコメント用のスマホの行方を目で追った。

（…こ、これ映ってるよね？コメント用のスマホは……、あ、コメントめちゃくちゃ流れてる、ってことは配信されてるんだ。こんな恐怖映像すっごいバズるかも…いやヤラセだと思われるかな、——ていうかこれ何？マジの幽霊！？）

恐怖と撮れ高への興奮で思考が高速で回転する。

その夢子を引き戻したのはぼんやりと浮かび上がった三つの輪郭だった。

「ずっと待ってたんだ」

「ようやく来てくれた…」

「やっと触れられる」

夢子を囲む、三体の、男。

年齢も容赦も推定できないほどその体は透けている。

「え……、ゆ、ゆ、ゆ、れ、…ゆうれい、」

夢子が上擦った声でそう言うとその数秒後にコメント欄の流れが一気に早くなった。

三方向から夢子の体を這い回る手。

それから耳を這っているのは背後にいる男の舌のようだ。

「ま、待って、なにこれ、なにこれー！！」

暴れようとする体を押さえ込まれる。

這っていた舌が一度引いたかと思えば、背後の男は夢子の耳を食んだ。

腰を這い上がる男はそのまま夢子の履いていたパンツと下着をずり下ろし、腕に絡んでいた男の手はシャツの中に侵入してきた。

「ねえ嘘、何する気…」

廃ビルの中で下半身を露出してしまった夢子。

背中や耳、太ももに腕にお腹に、触れる男たちの手はひんやりと冷たい。とても人肌ではない。

なのに何故か夢子の体は熱くなっていく。

「や、あ、…ちょ、っと…！」

ちゅ♡

横から首筋に口付けられ、男の手はシャツの中で夢子の胸をブラからこぼれさせた。

ちゅ♡ちゅ♡

小さく音を立てて夢子の薄い皮膚を啄んでいく。

そしてその手はシャツから出ていくと、シャツの上から乳首の位置を狙って。

すり♡

指先で撫でた♡

「……っ！」

怖い、はずなのに♡

ぼんやりとしか見えない指先にそこを撫でられ中の乳首がシャツを押し上げてしまう♡

啄まれている首元で小さく笑い声がしてそれを続けられた♡

すり♡

「っ、あ」

すり♡

「んう、」

すり♡

「く、あ」

すり♡

「あッ」

夢子の声が塞いでいる手の中で上擦ると♡

すり♡すりすりすりすり♡♡

すりすりすりすり……♡♡♡

「あッ、あ、あっ、あ……ッ♡」

「こっちもしてあげるね」

響く低い声がそう言ってもう片方も♡

すりすりすりすり♡♡

すりすりすりすりすり……♡♡♡すりすりすりすりすり♡♡♡

「あ……っっ、あ…ッ♡♡や、っ♡う♡♡♡」

乳首を勃たせるように高速で擦るから♡

立ったままの夢子の背中がビクビクと跳ねた♡

『何が起こってんの？いま幽霊って言わなかった？』

『夢子、金縛りにあってる？』

『なんかえっちい声出し始めてね？』

（私も何が起こってんのか分かんないよ、…てかもしかしてこの幽霊たちみんなには見えてないの？）

すりすりすりすりすりすりすり♡♡♡

すりすりすりすりすりすりすりすりすり……♡♡♡

「あ♡あッ♡♡あ♡っ♡ッふ♡んっ♡♡」

布越しに擦られる乳首への刺激に体がビクついてコメントを追えなくなってしまった♡

（まずい…！なんかこの幽霊たち私のこと気持ちよくしようとしてる！これって取り憑かれるやつなんじゃ、）

すりすりすりすりすりすりすり♡♡♡ すりすりすりすりすりすり♡♡♡

「んん” うッ♡♡」

（乳首完全に勃ってるのにずっと擦られてるう…♡布越しのすりすり気持ちいい…、指は冷たいのに乳首熱くなって♡触られてないクリがビンビンになっちゃってる…♡♡——いや、だめだ、こんなのリスナーに見られた



らやばい…！！)

足を踏ん張ってなんとか巻きついている腕から逃れようとした♡  
けれど♡

「あ…っ」  
シャツを完全に捲られ胸が外気に触れて♡  
足元にいた男は夢子のおまんこの割れ目をそっと撫でた♡

「…濡れてるね」  
「違っ、…ちが！そんなんじゃ、」

くち♡

指がそのぬめりを拾ってクリトリスを軽く押し潰す♡

「……ッ♡♡」

乳首を刺激され敏感になってしまっていたそこに触れられ、踏ん張っていた夢子の足は力を無くし、再び背後の男の腕に体重を預けてしまった♡

くち♡くちゅ♡♡

「うあ、あ♡」

クリトリスを押し潰した指がそこを往復する♡

くりゅ♡くちゅ♡♡ちゅ♡♡

「…ッ、っ♡あ♡♡」

勃起したみたいにビンビンになっているのをあやすように優しく撫でられて、不覚にもそこから快感がじんわりと侵食していつてしまう♡

それと同時に乳首もしつこく♡

すりすりすりすりすりすり♡♡♡

「あっ♡あ♡♡ん♡ッ♡」

抱きしめている腕に乗った膨らみの勃起した幹をピンポイントに擦られて♡♡

すりすりすりすりすりすりすりすり♡♡♡

「あ、あ” あッ♡♡……ッ！♡♡」

夢子は上体を倒したり、逆にしならせたりして逃げようとするものの、彼らに全く敵わなかった♡♡

くりゅ♡♡くちゅ♡♡くちゅ♡♡ぬりゅ♡♡ぬるっ♡♡  
♡

すりすりすりすりすりすりすりすり♡♡♡

「んっ、んん” ッ♡♡ふあっ♡♡や、だめ、……ん” ッ、う♡♡♡」

耳の薄い部分を食まれたまま、布越しの勃起乳首を擦られ膨らんだクリトリスを濡らされ押し潰される♡♡

男たちはひたすらそうして夢子を絶頂へ導いているようだった♡

(や、ばい、イカされる…！♡♡これ配信されてるのに！でも乳首もクリも一緒にされたら気持ちいいの我慢できない♡♡♡一回だけ♡♡一回イったら止める、絶対止める！あ〜〜〜〜、イク、イク…………♡♡♡♡)

くちゅくちゅ♡♡ぬりゅぬりゅぬりゅ♡♡♡くち、くち、くち、くちッ♡♡♡  
すりすりすりすりすりすりすりすり♡♡♡

「…………ツ、あ、あ♡♡♡だめ、だめ……、イク♡♡♡イク、…………っっ！！♡♡♡♡♡」

びくんっ！♡♡♡

膝から力が抜けるように夢子の体が今度こそ崩れた♡♡

人間ではないものに体を触られ、下腹部から頭のとっぺんまで快感が突き抜けた♡♡♡

体が床に崩れたことによって恐らく三脚にセットして

あるスマホの画角からは外れただろう。

しかし音は拾われているしコメント用のスマホは見えている。コメントは今まで見たことがないほど高速で流れていた。

床に尻もちをつくように崩れた夢子はそのまま後ずさる。

けれど少し離れたただけで見えなくなるほど色のない彼らの腕がその夢子の足を掴んで引き戻した。

「あんたたち、なんなの!？」

「気持ちよくするから許してくれ」

「俺たちここから離れられないんだ」

「こうして女性に触れるのも何年振りか…」

『夢子誰と喋ってんの?』

『廃墟オナニーしてんのか』

『もしかして出た?』

映らなくなった夢子を音と声だけで好き勝手に楽しむコメントたち。

夢子にはもうそれを追う余裕もない。

「うそ、待って…、や、」

床に仰向けに寝かされ、片足を持ち上げられ肩に掛けられた。

『足だ』

『やっぱ廃墟オナニーしてる？』

『声えろ』

大きく開かされた足の間に、ほとんど透明の体が押し付けられ。

ず、ん……♡♡♡♡♡♡

「ひッ……、あ、あっ」

そのまま体重をかけられた♡

冷たいのに熱いものがおまんこを押し広げ中へ進んでくる♡

「嘘でしょ、…な、……あっ♡」

一度絶頂した体にその感覚は鮮明だ♡

はっきりとちんぽの形におまんこが開いている♡

「キスしようか」

「え、う……」

ぬちゅ、ちゅ♡

ちんぽが進んでくると同時に唇を塞がれ♡

男は夢子の唇にしゃぶりつきながら腰を揺らし始めた

♡

とん♡とん、とん♡

ちゅ♡んちゅっ♡ちゅ、ちゅる♡♡

奥を優しく突くちんぽ♡

その優しさとは逆にしっかりと押さえ込まれた体で夢子はそのちんぽを受け止めるしかない♡

とん♡とん♡とん♡とん♡とん♡

「んっ♡う、っ、ん”♡♡…っ♡」

「気持ちいいよ、君のおまんこ」

とんっ♡♡とんっ♡♡とんっ♡♡とんっ♡♡とんっ♡

♡

興奮した声音で男がキスの合間にそう囁くと、その腰は強さを増した♡

とんっ♡♡とんっ♡♡とんっ♡♡とんっ♡♡とんっ♡

♡

膨らんだちんぽが奥を小突く♡♡

(…………っ、だめ、これ気持ちいい♡幽霊ちんぽ気持ちいい♡♡)

とちゅ♡♡とちゅ♡♡とちゅ♡♡とちゅ♡♡とちゅ♡

♡とちゅ♡♡

「う♡♡ん”、んッ♡♡ん” ッ♡♡♡あ♡♡は…ッ、♡♡」

「はあ……、幸せだ」

とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡  
とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡

「あ、ア”♡♡あ♡♡♡んッ♡♡♡ンッ、っ♡♡あ、だめ、…ッ♡♡♡」

「君も気持ちいいんだね、せっかくだからたくさん気持ちよくなってね」

そう言うと夢子にのしかかったその体を通り抜けた他の男たちの手が♡♡

それぞれがふわりと夢子の胸を包んだ♡♡♡

(え、通り抜け……？？？？あ、幽霊だから……？)

夢子の戸惑いをよそに片方の手は乳首を優しく挟み、もう片方の手は乳首に指を添えて♡♡

こり♡♡こり♡♡こりこりこり、こりこりこりこりこり♡♡♡

挟んだまま左右にこねて♡♡

ぴんっ♡♡ぴんぴんっ♡♡♡ぴんっ♡♡ぴんっ♡♡ぴんっ♡♡

勃起を弾くように指を上下させた♡♡♡

「あ”…ッッ！♡♡♡♡♡」

その気持ち良さに背中が浮く♡♡♡

「気持ちいい？君乳首すごく感じるんだね」

「あ、ア……、ッ、んっ、ん” む、♡♡♡」

腰を揺らす男に抱きしめられまた唇を塞がれ♡♡♡

なのに両乳首も二人の男に責められる♡♡♡

とちゅっ！♡♡♡とちゅっ！♡♡♡とちゅっ！♡♡♡

とちゅっ！♡♡♡とちゅっ！♡♡♡

優しかった男のピストンはまた力強くなった♡♡♡

こりこりこり♡♡♡こり、こり、こり、……こりこり

こりこりこり♡♡♡♡

ぴん、ぴん、ぴん、ぴんっ♡♡♡ぴんぴんぴんぴんぴ

んっ♡♡♡♡

夢子を煽るように乳首を責める手も容赦がない♡♡♡

(止めたかったのに……♡♡こんなの無理かも♡♡♡ち  
んぽ挿れられて、ぎゅーってされて、乳首もバラバラに  
責められて♡♡♡♡気持ちよくなっちゃう、止めるの無  
理、きもち……♡♡♡♡♡♡)

「……ッ” あ♡♡♡あ、はッ♡ん” ♡♡♡ッあ” ♡♡あ  
”、あ、あ” ツ♡♡♡」

「体ピンってしちゃって…イきそう？おちんぽでいっぱい突いてあげるね」

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ



……ツッ！！♡♡♡♡♡♡

「っ、あゝ あゝ あゝ ツッ♡♡♡♡あゝ♡♡♡ア、ツゝ♡♡♡や、ら、アゝ♡♡♡♡」

高まったピストンに思わず胸を突き出す♡♡♡

そうすると上を向いた勃起した乳首が余計に感じてしまっ♡♡♡♡♡

「いゝ、く……！！♡♡♡♡♡イっちゃうゝ！！♡♡♡♡♡」

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ  
ツッ！！♡♡♡♡♡♡

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ  
ツッ！！♡♡♡♡♡♡

男に抱きしめられたままの夢子の体がのけぞった♡♡♡

「あゝ ツゝ ……………ツッ！！！！♡♡♡♡♡♡♡」

大きな絶頂に視界が霞む♡

その霞んだ視界では彼らの姿は余計に認識できない♡

肩で息をする夢子の足を、すぐに他の男が広げたようだった♡

「次いくよ」

「だ、だめ、待って……まだ」

体が足の間に入ってきて強く腰を掴まれた♡

そのまま腰が浮く♡♡そして突き上げるような格好で浮いた夢子のそこへ♡♡

ぬ” ぢゅ♡♡♡

ぬる♡♡ぬ” る…♡♡♡

「あ” ♡♡あ、っ、あ♡♡……あッ♡♡♡」

次のちんぽが埋め込まれた♡♡♡♡

絶頂で萎えようとしていた体に、奥からまた快感を植え付けられる♡♡

(いったばっかで♡♡またちんぽ挿れられてる♡♡♡冷たいのにおまんこ熱くなるちんぽ……♡♡♡♡)

背中と肩を床に押し付けなんとか体を支えている夢子に、男は腰を動かし始めた♡♡

ずちゅ、ずちゅっ♡♡

「ッ、あ♡♡」

腰を押し付けたまま更に奥に押し込むような、鈍い衝撃を感じてしまう動き♡♡♡

ずぷ♡♡ずちゅッ、ずちゅッ♡♡♡

「あゝ、は、ッ♡♡あ♡♡♡」

立て続けに与えられる快感に夢子は頭も床に押し付け喉をそらす♡♡

ずちゅッ♡♡ずぷッ♡♡ずちゅ、ずちゅ♡♡♡

ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅッ♡♡♡♡

「んゝ あッ♡♡あ、…ッゝ♡♡あ♡♡♡あゝ、んゝ♡♡」

（き…、きもちいい、……♡♡♡♡イったおまんこにちんぽピストンされるのいい♡♡♡♡おまんこの奥ぐずぐずにされるのいい……♡♡♡♡♡）

「随分気持ちよさそうだな」

「いーっぱい気持ちよくなるうね、またこっちもしてあげるよ」

おまんこの奥に感じるちんぽに夢中になっている夢子の  
頭上から、一人の男が両手を伸ばし指で乳首を挟んだ  
♡♡

「あ、っ♡♡♡」

「こんなに乳首勃たせて…」

きゅ♡♡

勃起乳首を人差し指と親指で挟んで♡♡

きゅー〜〜〜……♡♡♡♡

「ッ、お♡♡♡♡」

伸ばすように引っ張ってから♡♡

ぐりぐりぐりぐりぐりぐり…♡♡♡♡♡

「ッゝ！〜〜〜〜〜ッッ♡♡♡♡♡」

んこねくり回した♡♡

ぐちゅっ♡♡♡ぐちゅ、ずちゅっ♡♡♡ぐぶッ♡♡♡

ぐちゅっ♡♡♡

ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐり……♡♡♡♡♡

その間も止まらないちんぽの圧で体が小さく揺らされ  
る♡♡

そうされると乳首が軽く引っ張られて♡♡余計に感じて♡♡♡

「うゝ、ッお♡♡……ッゝんゝ！♡♡♡♡」

強い刺激に浮いていた夢子の足がピン！♡と伸びた♡

♡

ぐちゅ、ずぶ、ずちゅッ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡ぐちゅ

っ♡♡ぐちゅっ♡♡

ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐり……♡♡♡♡♡

「お♡♡♡ッ、♡♡お♡♡♡……っほ♡♡お”ッ♡♡♡」

乳首から電流のような快感が走りおまんこの奥が更に疼いて♡

夢子は頭を更に床に押し付け白目になりそうになりながら声を漏らした♡♡♡

「いい顔するな、こっちはどうだ？」

そこへもう一人の男がクリトリスに手を伸ばし♡♡かりッ♡♡♡

爪先で微かに皮から露出したクリトリスを♡

カリカリカリカリカリカリカリカリっっ！！♡♡♡♡♡♡♡♡

勢いよく弾くから♡♡♡

「ん” お” ……ツツおおおおおッ！！♡♡♡♡♡♡♡」

夢子はその小さな神経の粒に与えられた刺激で爆ぜるように体をビクつかせてすぐさマイった♡♡

「あっはは、この子すごいな」

——ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅッッ

ッ！！♡♡♡♡♡♡

「うおッ！？♡♡お、お、っ、お……………！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

絶頂して、きゅうっ♡と閉まったおまんこに逆らうような奥への小刻みピストン♡♡♡

男は浮かせた夢子の腰に高速で腰をぶつける♡♡

■製品版にて♡